



応接兼局長室床脇の天袋は金の鶴に銀の波涛の透かし彫、地袋の襖絵は四君子の文人画に細工物の引き手付



書院窓には散り松葉の組子吊棚は芭蕉葉の巧みな彫刻その裏に蝸牛という洒落心



銘酒「鶴泉」とともに

江戸末期の安政年間に始めた酒の仕込みは、長く鶴巻家の業として代々の当主が受け継いできました。(昭和十六年に酒造業を廃業し、酒販業として同二十三年まで営業。) 大正元年の火災で木造酒蔵と原酒五百石を焼失し、仮設で続けていきました。が、同十年に鉄筋コンクリート造二階建の酒蔵を建てました。近在には前例もなく、当主自らが先駆者の如く、書籍でコンクリート建築を学び、東京からも技術者を招いて研究を重ねて完成したものです。落成式には、直径一尺余の隅餅が供えられ、雨中にもかかわらず、餅拾いの群衆で賑わったということです。鉄筋コンクリート造の壁は、二階が一階よりも薄く、その段差に二階の床梁を載せています。二階の木造床組を支えるコンクリート支柱は非常に細く、コンクリート構造を木造の延長で理解しながら構築していた形跡が窺われます。屋根構造を支えるのは木造トラスボルト締め。屋根はアスファルト防水紙にタールを塗布したもので、当時子供達が屋根に登って遊ぶと足裏に黒いシミがついたという話です。

蔵から店までは母屋の土間を通して酒樽を運んでいました。その年の酒造りが終了すると、米を蒸す「ふかしど」に感謝し、賑やかな「どころばし」の祝宴が開かれたものです。



七谷のハイカラ郵便局

鶴巻家は明治二十二年に、七谷で初めて切手類及び印紙売捌人の許可を受けていましたが、大正十五年に現母屋に郵便取扱所が設置され、当主が所長を務めていました。昭和十年の七谷郵便局への昇格を機に、当時のお金で四千円の私費を投じて別棟の局舎を新築し、一時は電話交換業務も兼ねて昭和五十六年まで使われていました。当時大流行していた擬洋風の「ハイカラ」建築です。設計は県庁の技師に依頼し、加茂の名大工、佐藤定一棟梁の施工です。建築用材としては、林業経営も兼ねていた自家所有の山林から伐採した木を多く使いました。

屋根は瓦葺の寄棟で、正面玄関上にはマンサード屋根、縦横の下見板張りペンキ塗り外壁に、窓枠や破風の白い線が洒落た雰囲気を与えています。よく見れば、玄関扉の彫刻欄間や隅棟瓦の先に通信業務のシンボルである千印も見られます。業務室内部は木床に腰板と洋風の造作ですが、応接室兼局長室の床の間や天袋地袋の建具には、大変に凝った和風の意匠が施されています。この小ぶりの建物の中に、和洋折衷の職人技と魂が寄り添い、昭和初期の面影を今日に伝えています。



清酒「鶴泉」のラベルと大正十年に建てられた鉄筋コンクリート造の酒蔵。今では緑の蔦に蔽われています。

鶴巻家住宅・酒蔵・旧七谷郵便局舎 (加茂市指定有形文化財)

所在地 〒959-1336新潟県加茂市黒水856 (県道加茂-下田線の現七谷郵便局裏)
見学を希望される方は事前にご連絡ください。(連絡先 0256-53-1688 鶴巻家)

リーフレット制作(平成16年) 監修/山崎完一 写真/岩淵猪三郎、長谷川裕子、関由有子(A D)



黒水の家と人々の歴史

鶴巻家は江戸末期から村松藩七谷村（現加茂市七谷）で、肝煎を務めた豪農の家系に連なります。（土倉の鶴巻長助家から弘化五年に分家して以来、金助・暢作・満勢・直蔵・猪久太・久・当代に至る。）明治八年に現地、黒水に移住し、酒造りや林業、郵便局などを家業として経営していました。現住所で約百三十年の歴史を数えます。

この明治初期の住宅、大正期の酒蔵は当時近所に前例のないコンクリート造、そして昭和十年の擬洋風建築である郵便局舎の三つが残されており、今日では珍しい建物群になっています。（平成十三年・加茂市文化財指定。）近代の三時代を通じて、親から子・孫へと連なる一族のあゆみと、新潟県の近代における地方小地主層の生活や経営ぶりがよく伝わってきます。

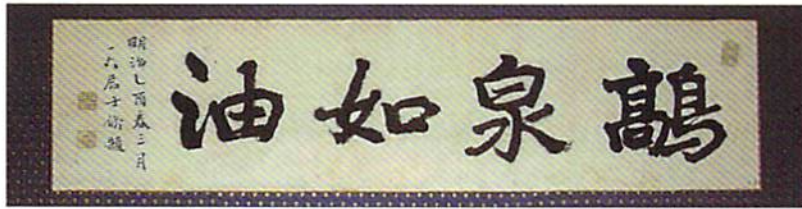
建物には時代時代を語る技術や思想が反映され、そして生活のにおいが染みついていきます。古い建物に触れ、見て、考えてみる。自分達の先達の生活と歴史を思い起こすことは、今日の私達が明日を生きる糧になると考え、保存活用に努めています。



玄関大戸に残る風格ある書は、「鶴泉」の銘。春秋に催される音楽や落語の会では、店と茶の間を開放しています。土間の吹抜けには、突出しのあかり窓が並びます。

「鶴泉、油の如し」明治期に鶴巻家に逗留した巖谷一六居士は、御礼の気持ちをこめて書をしたためました。当時は、油のように黄金色でとろりとした酒が良しとされ、好まれたといわれます。

※巖谷一六（本名 修 1834-1905）は硯友社の設立者で、俳人
明治の三筆に数えられる書家



切妻の大きな瓦屋根、堂々たる構えを見せる母屋正面の佇まい。妻壁の貫や格子の直線と軒瓦の曲線が織り成す陰影が美しい。



前二階縁廊下の硝子戸と座敷の障子（印刷紙面の背景は摺硝子の紋様）

木造二階建、切妻造妻入の母屋は、北面する玄関から南に伸びています。玄関前の土間には雪国の雁木の原型ともいわれる庇が張り出して、酒造・酒販業という家業の面影を残しています。大戸のある玄関を入ると、通り土間が奥へ続き、これに面して店から茶の間・中の間・台所・居場が並び、東側には仏間・寝間・出戸の間・台所と続いて、家族の就寝と様々な家業の空間でした。二階は一階の茶の間上部を境にして、前二階と裏二階に分かれています。平成五年に南半分を改造し、現在、古い部分は茶の間までになりました。茶の間の上部は吹抜けで、床の間、仏壇と神棚、自在鉤と囲炉裏があり、随所に明治初期まで一般に使われていた和釘が見られます。

道に面する前二階は二間続きの座敷で、奥の十五畳の正面に九尺間口の床と脇棚が並びます。当時は加茂川の水運を利用して酒を運ぶ船頭達が寝泊りする場所であり「船頭部屋」と呼ばれていました。昭和四年、先代当主の婚儀の折に改造され、端正な書院が設けられました。

座敷の北側から東側の階段まで鉤の手に配された松板張りの縁廊下は、寺社の底下縁のように短手方向に張られています。一筋鴨居に嵌められた摺り硝子戸と外部の堅格子から射しこむ光が、年月に磨き込まれて黒光りする縁側にやさしい陰翳を映し、この静けさと往時の船頭衆の賑わいが、時を経て交錯するような雰囲気を感じます。



前二階奥座敷の床の間書院には、改修の折に精緻な組子障子が嵌められました。その床脇に並ぶ窓は左官職人の丁寧な磨き仕上げで、庭の樹木も額絵の趣です。